

# 奈良県布目ダムにおけるチャネルキャットフィッシュの食性

小林誠・河内香織（近畿大学農学部）

## 【目的】

日本の河川内において高次捕食者である魚類のナマズ *Silurus asotus* は現在減少しており(田崎&金澤 2001)、その空白となる生態的地位へのチャネルキャットフィッシュ *Ictalurus punctatus* など高次捕食者である外来魚の侵入・増加が危惧されている(片野ほか 2004)。本種は先行研究より、生息場所やその餌料環境によって利用する餌を柔軟に変えること(Bailey & Harrison 1948・Hubert 1999)、外来種として在来生態系に影響を与える恐れがあること(Ligas 2007) が指摘されており、我が国では特定外来生物として指定され、生態解明が急務とされている(環境省 2005)。しかし、本種の国内における生態についての先行研究は、原産国の環境に比較的近い霞ヶ浦周辺にて実施されたものに限られ、河川内、特に川幅が狭く勾配の大きな河川上流部における研究事例は乏しい。そこで本研究では、奈良県にて本種が初確認された(河川水辺の国勢調査 2007)、河川上流部に位置する布目ダム及び下流河川にて、生物の生態を知るうえで重要とされる食性調査(Fabre 1913)を本種に対して実施した。

## 【調査地・方法】

調査は奈良県奈良市を流れる淀川水系木津川の支川である布目ダム(34.701N,135.977E)及び下流河川にて行った。調査期間は 2016 月から 2018 年 11 月までとし、釣り等により、*I.punctatus* を始めとする魚類を捕獲した。捕獲した個体は標準体長、体重、胃内容物重量を計測した。胃内容物は実体顕微鏡下で可能な限り種まで同定し、個体数と重量(1mg 単位)を計測した。胃内容物から、個体数比(%N)、重量比(%W)、出現率(%F)を求め、餌料重要度指数(IRI)を算出した。また布目ダムにおいて、今後の駆除の努力量の基準として個体数密度調査を除去法より実施した。採集、捕獲については奈良県より採集許可を承り以下に臨んだ。

## 【結果及び考察】

布目川では H28 年夏の個体にて、全ての体長区分において魚類及び陸生昆虫の IRI が高い値を示した。H29 年以降では水生昆虫の IRI が増加することが伺え、在来ナマズ類のギギと餌資源が類似することが判明した。H30 年以降では本種の個体数が激減し、本種は河川上流部における定着に不向きである伺える。布目ダムでは H30 年の 20cm 以下の個体では水生昆虫、20~40cm では陸生昆虫、40cm 以上では陸生昆虫、魚類、爬虫類など成長に伴い餌資源が多様化していた。20~40cm の個体において、陸上由来である餌資源の爬虫類、植物、陸生昆虫の IRI が H28~H30 年の 3 年間の間で 17%~93%と通年高かった。特に陸生昆虫の IRI が高く H30 年夏では 76%であった。植物(木の実)、陸生昆虫に関しては岸際の河畔林からダム湖水面へ供給されたと考えられ、本種が水面付近を餌場として利用している可能性が示唆された。個体数密度に関しては除去法により 200 個体以上の生息が推定される結果となり布目ダムでの定着が安定していた。